

ヒーローになれない男たちの身体

——ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』から『ジャンヌ』へ——

高岡 尚子

19世紀の近代国家の成立過程において、個々の自我が確立されるのと同時に、あるべき国民のステレオタイプが形成されていく。この「社会にふさわしい人間（国民）」をジェンダーの視点から言い換えると、「あるべき女／男」あるいは「理想的男性像／女性像」ということになる。19世紀フランスにおける「あるべき男」の特徴と変遷についてはすでに詳述したが¹、主にプラスの価値を持った「理想的男性像」の移り変わりに注目し、規準から大幅にはずれる青年たちについては多くを述べなかった。本論では、したがって、理想に合致しない青年たちに焦点をあて、その特徴と、彼らがどのように、なぜモデルから隔たっていくのかを考察してみたい。その際、前稿で扱ったジョルジュ・サンドの『アンディヤナ』を出発点とし、『アンドレ』と『ジャンヌ』を分析の対象とする。

1. 1830年代から1840年代へ求められる「男性像」の変化

1832年、ジョルジュ・サンドがその筆名で初めて書いた小説『アンディヤナ』には、七月革命前後のフランス社会における男性のあり方を、典型的に表現する男性人物3名が登場する。彼らによって表象される「男性性」のそれぞれについては前述の論文に詳述したので、ここでは「その後の男性たち」につながる要素を抽出し、同時に、それらを生み出す土台となる、30年代から40年代にかけての社会の変化と作品テーマの変遷について指摘しておく。

「父亡き後」の青年たち

大革命からナポレオン帝政期に求められた理想の男性像は、復古王政期を経て特に七月王政期以降、重大な変更を経験することになる。このことを Deborah Gutermann は「法と剣の所有者であった父親」と「1815年以降のフランスに生まれ、戦争とは別の手段

で＜男＞にならねばならなかった息子」の断絶として説明するが²、それはすなわち、王や皇帝といった存在が象徴的に体現する絶対的価値としての父の消失と、新しい理想像を無理やりにでも作らねばならない世代の苦闘を示していると言ってよい。『アンディヤナ』においては、父親世代の代表がヒロインの夫であるデルマール大佐であり、息子世代の代表を、レイモンとラルフの二人が対照的な形で担っている。

裕福な貴族の家庭に生まれ、復古王政期には「どのような場面においても現行の社会における勝者」であるレイモンは、「いつも幸福であり、他人から常に完璧な取り扱いを受ける」者として描かれる³。たとえ七月革命によって社会的立場が激変しても、新興ブルジョワの娘婿となり、新しい潮流にやすやすと乗り換える器用さを発揮して、まったく恥じるところがない。一方のラルフは、幼い頃には家族に嫌われ、長じて「人生において不幸と嫌悪感しか経験していなかった」とされる。王党派とブルジョワの価値観の間を身軽に行き来するレイモンとは異なり、ラルフは「いつも共和制の夢を主張し続け、あらゆる弊害、偏見、不正を正したいと願って」いるが（I, pp.166-7）、その理想はもちろん、簡単に実現されるものではない。物語の最終場面には、ラルフの信条が反映された理想のコミュニティの一端が描かれているとはいえ、そこには閉ざされた空間という留保が存在するのである。

二人を比較し、物語空間外から客観的な判断をすれば、明らかにレイモンに分があることになろう。誰からも愛される「寵児」レイモンには、確かな政治信条や人生観がないとしても、不安定な時代を生き延びる才が与えられているのは確かである。だが一方で、彼は他者に対する配慮や尊重、誠実さといった点で難があるように描かれてもおり、そのことは、作家サンドの政治信条に加え、物語空間が作り上げる価値意識か

ら判断すれば、致命的な欠陥ともなろう。この点がラルフとの決定的な差である。ラルフには、人に愛される才能もなく器用さも与えられていないが、「新しい種類の人間の創造への期待」(I,p.167)だけは、揺ぎ無い信念として付与され、剥奪されることもないのである。この、作家の代弁者とも言えるラルフが社会から徹底して冷遇されるのに対し、自己についての現世的優位を見極めるのに長け、他人への関心を払うことをしないレイモンが優遇される状況は、作品がそれ自体として、理想的な男性モデルを持たないことを示しているとも考えられる。レイモンの立ち回りは優秀だが、理想の男性像ではない。ラルフの信条は貫かれるべきものとして維持されるが、やはり彼も、理想的な男性のあり方として尊重されることがないのだ。

ロマン派・フェミニズム的作品から社会主義的作品へ

では、二人の人物像がその後の作品でどのように変化し、新たな男性像へとつながっていくのか。それを考察するために、作家の作風と作品テーマが、30年代から40年代にかけて、どのように変化するかをたどっておきたい。

ジョルジュ・サンドは『アンディヤナ』の発表以来、1876年に没するまでの間、継続して執筆活動を行っていたが、文学史上では執筆時期を四分割するのが一般的である。第一期(1832年～1837年頃)は「感傷的ロマン主義の時代」とまとめられ、主に初期の、女性にとっての不幸な結婚や恋愛の情熱をテーマにした作品群(『アンディヤナ』、『ヴァランティエヌ』、『レリア』など)を指し、『モーブラ』(1837)までを一区切りにすることが多い。この時期の作品には、『アンディヤナ』に見られるような、女性の社会的弱者としての苦しみを告発する内容が顕著なため、「フェミニズム的作品群」と呼ばれることもある。それに続く第二期(1838年頃～1847年頃)は「神秘主義的社会主義の時代」と名づけられ、ラムネやピエール・ルルーら社会主義思想家の影響の下に、理想主義的な作品群を生み出した時期とされる。この時期の作品は「社会主義小説」(『フランス遍歴職人たち』、『アンジボーの粉ひき』、『アントワーヌ氏の罪』など)という分類をされることもあり、多くの作品に共通するのは、次代に求めるべき理想社会と、そこに生きる人間像の模索というテーマである。本論が扱おうとする

1830年代から40年代にかけての作品群は、主にこの第一期と第二期にあたる。この間の流れを大まかに示せば、作家個人と密接に関連するフェミニスト視点での、主に女性の生／性を書くという行為から、そうした問題の解決も含めた理想郷を作品内に創造させることへの変化である。そうであればもちろん、作品に登場する男性人物とその役割が大きく変わるのは当然だと言える。

また、作品の変遷を正しく認識するためには、社会そのものの変化とそれにとまって揺れ動く「期待される人物像」のあり方を把握しておく必要があるだろう。『アンディヤナ』(1832)から『ジャンヌ』(1844)に至る時期はすでに述べたとおり、七月王政期(1830～1848)に重なる。七月王政期は政治的にも経済的にも、近代社会の仕組みをほぼ確立する時期であり、そのことは同時に、前時代の価値観からの脱却を達成せねばならない時代であることを意味している。名誉や血統、腕力や武力が重要だった時代から、個として立ち回る能力と金銭が幅を利かす時代へ。端的に言えば、貴族や軍人が力を誇示する世界から、ブルジョワが君臨する世の中への変化であり、André Rauchはそのことを次のように説明する。

名誉の戦場、「美しい死」が長生きに勝るとい
う、ホメロス風の勇壮な価値観が支配する場から
は遠く隔たり、ブルジョワは、社会による承認と
個人としての安定をつなぐ自己愛を、特権的に
誇ってよいものとするのだ⁴。

このような価値観が背景にある社会の中で、期待される男性像とはどのようなものか。問いかけの一つ目はそれであろう。では、その男性像に見事に「適う」者が現実にいるとして、「適わない」者はどのように表象されるのか、あるいは、適わないことによってどのような扱いを受けるのか。さらには、この「適わない」人物たちは、積極的に努力をした後に脱落を余儀なくされたのか、もともと「適うつもりがなかった」のか。『アンディヤナ』から『ジャンヌ』にかけて、サンドは、このすべての問いに答えるような人物を次々に創造していくが、その発端となっているのが、レイモンとラルフなのである。

2. 適合と不適合の形：レイモンの系列／ラルフの系列

『アンディヤナ』において、レイモンは社会に適合する者として描かれてはいるが、一方で、作家にとっての「理想的男性像（人間像）」を体現することはない。他方、ラルフは資質を与えられているが、一方で、社会一般からの離脱と反抗を余儀なくされる。ここに明らかなのは、当時のフランスで一般的に求められていた「理想的男性像」と、サンドが思い描くそれとの間には乖離があり、当然のことながら、そのずれは明確に作中人物像に反映しているということである。この事実は、『アンディヤナ』以降の作品にも引き継がれ、その乖離はさらに度を増していくように思われる。

レイモンの系列

レイモンの「適合」を可能にする要素として、ひとつには、彼自身の持つ魅力が指摘され、さらには、その長所によって周囲の人間から承認を得る能力が付与されている。それはまさに Rauch が言うところの「社会による承認と個人としての安定」であり、それをつなぐ「自己愛」がレイモンを社会的強者の立場に据えるのである。では具体的に、彼の安定を可能にする個人的な魅力とは何か。作家はそれを、「言葉の力」であり、言葉を用いての「演じる力」であるとし（I,p.220）、それが「信じがたいほどの影響力」（I,p.128）を生むために社会からの承認を得るのだと述べる。「弁舌の才は、大革命下の言葉が重要視された時代にあって、公的な人間の美徳を表すものとなった。レトリックと同じく、雄弁は男性にふさわしい才能になった⁵」と Rauch は指摘するが、レイモンの弁舌の才は、そこからはややずれる。男性にふさわしい力としての「雄弁」という価値観は受け継がれてはいるが、そこにはあるべき中身や信念がない。「いつも自分を守ってくれる、周りの人たちみんなからの好意の原因を探してみる時、それが自分自身の中にあると思う」（I,p.77）レイモンには自己への無条件の信頼と誇りはあるが、他者への配慮と誠意はない。たとえ彼の弁舌が他人に感銘を与えたとしても、それは演技力によるものであり、表明された意思や思想のゆえではない。そして、これが求められるべき男性像のひとつのモデルだとするならば、社会の価値観こそが、そう

した人物のありようを弾劾するのではなく承認しているから、ということにもなるだろう。

彼の系列に連なる人物としては、『オラース』（1842）の主人公オラースや、『ジャンヌ』に登場するレオン・マルシヤが挙げられる。オラースは地方のブルジョワの一人息子で、パリで法律を学んでいる。が、彼は特に熱心に勉学に打ち込むこともなく、友人たちのように社会改革を目指すものでもない。ただ、「議論は彼の得意」であり、「聞いている者は内心、彼は完全無欠の理論家ではないとしても、たくさん話すし、達者だし、情熱的な演説家だよな、と認めることになる」のである⁶。オラースはパリでさまざまな経験をするが、作品中の絶対的なヒーローとして描かれることがない。むしろ、作中の女性主人公にとっては辛い恋の相手となり、その点もレイモンと共通している。最終的には故郷に帰って弁護士となるが、その結末もまた、ブルジョワ社会が提供する安定という側面からすれば、レイモンの行く末と相通ずる。

『ジャンヌ』のレオン・マルシヤは、オラースをさらに純化させたような存在だと言える。彼もまた地方のブルジョワ家庭の息子で、パリで法学を修める。物語が始まる時点ですでに、弁護士としての才能を発揮し、25歳という若さで相当の稼ぎも得ている。その意味においては、彼は「適合している」だけでなく、「成功している」男性であり、その姿には当時の価値意識が与える利点が反映されていると見て間違いがない。それにもかかわらず、作家の筆は、彼を描くのに辛らつであり、その口調は弾劾とも読むことができる。

繊細、働きもので活動的。やり手で根気もあり、エゴイストで自由主義者。そんなマルシヤはマルシュ人の模範だった。彼の力みなぎる身体は、快楽にも労働にも向いていたし、享受するにも欠乏を耐えるにもふさわしかった⁷。

マルシヤは、彼の故郷マルシュでは「モデル＝模範」と讃えられる性質の持ち主だが、エゴイスティックで自己の欲求を傍若無人に追及する姿も同列に描かれる。弁舌の徒である弁護士としての才を発揮する真面目さと情熱ぶりが讃えられ、高額報酬も保証される彼は、ブルジョワ男性のあり方としては、非の打ち

所がない。だが、そこに隠された暗部に対し、作家サントは容赦がない。ある意味ではモデルだが、ある意味ではモデルにならない。そのような側面が、レイモンの系列に属する男性にはある。

ラルフの系列

一方のラルフは、レイモンとまったく逆のやり方で社会から遇されていると言ってよい。人生において「不幸と嫌悪感しか経験しなかった」(I,p.166)ラルフには、自己を社会的強者だとみなす根拠がひとつもない。とは言え、それなりに裕福な貴族の家庭に生まれた彼は、経済的に恵まれないという意味での社会的弱者でないことも確かである。ラルフの不幸の源泉は、幼いころから家族の中で疎外されて育ったことにあり、「自分自身に対して嫌悪感を持つように育てられた」彼は人生に絶望し、「15歳の時には憂鬱の発作に襲われた」のである(I,p.157)。あまりに孤独に育った彼は、他人に理解されようとする努力をすることの空しさから、自分自身を知ることを学ぶ。結果、能弁を駆使し、誰からも愛されるレイモンとは反対に、「不器用で憂鬱で、ほとんど自分を外に出さない」(I,p.157)ラルフは、「社会による承認」を自ら放棄しているようなところがあり、それがかせになって「安定した自己」を手に入れることもできない。彼が他人の目に「エゴイスト」と映る原因はそこにある。このような「憂鬱の発作に襲われ」、内省のうちに沈潜する人物たちは、この時期のフランス小説に頻出する。シャトブリアンのルネやコンスタンのアドルフに代表される「世紀病 *mal du siècle*」の発症者たちとラルフとの間には、強い近似性を指摘することができるだろう。しかし、ラルフは、ルネやアドルフの正統な継承者というわけでもない。そして、その違いを形成するのは、彼の社会に対する「怒り」と「攻撃」であり、異なる(より良い)社会への期待なのである。François Kerlouéganは、この時代の社会に対して不適合を起こす人物たちの症状を、単なる社会的軌轢の結果とは考えず、「反抗の形」でもあると指摘している⁸。こうした人物たちにはもちろん、「適合できない」側面が備わっているのは当然であろうが、「適合したくない」という積極的な拒否の姿勢を指摘することもできる。ルネやアドルフの症状にしてそれであれば、ラルフの示す激しい怒りはさらに積極的な

「反抗の形」と言えるだろう。

ラルフを源泉とする、他人からの承認を得ることが難しく、それゆえに時代にも適合することがかなわないが、適合を要求する社会そのものに対しては激しい抵抗を示し、自我をゆるがせにすることがない人物像は、『ヴァランティヌ』(1833)のベネディクトなどを経て、『ジャンヌ』のアーサー卿や『アントワヌ氏の罪』(1847)のエミールへと引き継がれていく。特に『ヴァランティヌ』のベネディクトなど、30年代に発表された作品には、社会からの承認の困難と憂鬱、さらには極端な自己愛を持つ男性人物が頻出し、その意味ではラルフよりずっと救いがないように描かれる。一方、40年代に書かれた「社会主義的作品群」に登場する青年たちは、困難は経験しても、それ乗り越えることにより、新たな社会の運営者となる可能性を与えられている。

3. 「機能不全」の形：第三の系列

ジョルジュ・サントが最初の作品に示したラルフとレイモンというあり方は、後の作品に現れる多くの男性像の原型と読むことができるのだが、30年代から40年代にかけての小説には、一見、ラルフとレイモンの折衷、あるいはラルフの系列に属するかと思えるがそうでもない、一群の男性たちが登場する。彼らの特徴は、ラルフとレイモンの折衷ではあるが、どちらの長所をも受け継がず、短所のみが明確に出現する点にある。具体的に述べれば、ラルフの憂鬱や内省と自己表現力の弱さは受け継ぎながら、不正に対する怒りや社会改革への意志といった気骨には恵まれない。また、レイモンの示す無批判の自己愛は受け継ぐが、他人への配慮を度外視しても社会からの承認を取り付けるといった豪胆さも与えられていないのである。彼らは物語の中で「ヒーロー *héros*」の役回りを与えられてはいるが、その性質は、元来「ヒーロー」を定義するのに不可欠な強靱さではなくむしろ「弱々しさ」であり、その意味では「反ヒーロー *antihéros*」のモデルタイプと考えることもできるだろう。こうした男性像は理想的モデルではないが、その複雑さゆえに、当時の男性たちへの矛盾する期待や現実を露呈している点で、読み手の関心を惹くのである⁹。本論ではこのグループを第三の系列ととらえ、その特質を、身体性とその発露という観点から検討してみたい。

「機能不全」というあり方

Kerlouégan は、「ロマン主義は男性の新しい身体的タイプを創始した」と述べ、代表としてシャトーブリアンのルネを挙げている¹⁰。その身体的タイプとは、以下のようなものである。

古典的な身体が、ハーモニーに恵まれ、均整が取れているのとは逆に、ロマン派的な身体は、激しくリズムカルで矛盾する様式に則って機能している。そしてこのことによって身体は、周りの世界に関わることに、不適合を引き起こすことさえあるのだ。[...] ロマン派的身体の気まぐれさは、自己と世界の乖離の身体化という形で現れる。ひとことでいえば、身体機能不全は、精神と感覚の不和を真似るのである¹¹。

「ロマン派的身体 corps romantique」と呼ばれる新しいタイプの男性身体は、調和の取れた健全な肉体とは相異なり、その不安定さを特徴とする。また、こうした身体は自己と周囲との無意識的融合を拒むため、際立って神経過敏な状態となる。「精神と感覚」は一致を見ず、常に違和感にさいなまれるため、肉体が無理なく動くことの妨げにさえる。結果としてこうした人物たちは、「憂鬱 mélancolie」に陥り、肉体的疾患を引き起こすことも多い。この、あえて強調される不調和や機能不全に関心を寄せるとき、サンドの小説世界にも、こうした人物が散見されることに思い至る。ここに検討する第三の系列に属する男たちとは彼らの仲間なのであり、その代表として『アンドレ』の主人公アンドレと『ジャンヌ』のギヨーム・ド・ブサックを挙げることができる。

『アンドレ』の主人公アンドレは、地方に住み、農地や山林からの上がりて生活する侯爵の一人息子で、友人に公証人の息子ジョゼフがおり、町の女工ジュヌヴィエーヴに恋をする。心身ともに弱く、活動力に乏しい彼は、ジュヌヴィエーヴへの恋を語るには才能を発揮するが、自身の生活を支えることができない。物語は彼らの恋（と結婚）と父侯爵からの妨害を軸に進み、結末にはジュヌヴィエーヴの死産と病死が待っている。アンドレは生きながらえるが、精神の平衡は保たれていない。一方の『ジャンヌ』の登場人物ギヨームもまた、地方の小さな町に住む男爵家の一人息子

で、村の羊飼いの娘ジャンヌに恋をする。真の友人とは言えないが、ジョゼフに対応する人物として、すでに述べたレオン・マルシヤが配置されている。アンドレと同じく、心身の安定と活力に乏しい彼は、ジャンヌを恋することはできるが、彼女の本質に触れることができない。ジャンヌの死が結末にあり、ギヨームが生き残る点でも『アンドレ』に類似するのだが、この作品には第三の男性人物アーサー・ハーレー卿が配されている。ジャンヌの本質にある美点を理解し愛したアーサーと、マリー（ギヨームの妹）に導かれ、ギヨームは自身の役割を果たしながら生きる道を見出す。

このようなアンドレとギヨームに共通する特徴として、第一に指摘する必要があるのは、彼らに頻繁に起こる身体の不調とむら気である。

彼[アンドレ]は子どもの頃、病気がちで無口だった。思春期になると、物憂げで不安そうで、異様な態度を見せるようになる。自分の中に、大きな野心が生まれたと思い、熱に浮かされて上昇するように感じて、次の瞬間には突然、絶望に打ちのめされて下降するという具合だった¹²。

ここに示された青年の姿はまさしく、ルネやアドルフを彷彿させるものである。物憂げで不安そうではあるが尊大さも備わっているところや、自己愛の強さと自己評価の低さの共存もまた、彼らと共通している。アンドレは、子どもの頃から病弱で周囲の手を煩わせるが、そのことによって周囲の人間との間に一体感が生じるわけでもない。周囲の理解を阻む自己は、まるで自家中毒を起こすように、病を得るのである。彼はまた、ある瞬間には激しい感情にとらわれても、次の瞬間には覚めるというむら気な性格を持つが、このことも周囲との不和と無関係ではないだろう。調和と安定によって承認を得られるレイモンやマルシヤのような人物とは、その意味でも明らかな対照をなすのである。

ギヨームの人物紹介は、アンドレの場合とまったく同じというわけでもない。その違いは、執筆時期に拠るところが大きいと思われ、アンドレのような青年を揶揄しているようにも描かれる。「勇敢な青年、物腰は少し引いた様子だが、心根は大変誠実」なギヨーム

はしかし「小説的な気質」も持っている (J.,p.42)。彼は弱い人間ではないのかもしれないが、内面に拭いられぬ憂鬱を抱え続ける人物として造形されており、それはつまり、何かのきっかけによって、心身のバランスが容易に崩れ去ることを示す人物でもあるということだろう。ジャンヌの母を葬った後、彼女を連れて実家のブサック城に戻ったギヨームは、重い熱病にかかり、生死の境をさまよう。その後、症状は回復に向かったため、ギヨームは友人の英国人アーサー卿とイタリアへの保養旅行に出かけるのだが、ブサックに戻ると憂鬱がぶり返す。

ギヨームは陰気になり、物思いにふけるようになった。病を得て以来というもの、この青年もまた、心の中に秘密を抱えるようになったのである。彼の穏やかで優しい性格は、発作のただなかにあってさえ、崩れ去ることはなかった。イタリアにいた時には、かつてと同じ穏やかな思考の流れを取り戻したと思えたのだが、ブサックに帰ったとたん、そうはなりたくないのに、病後の回復期の状態に引き戻されたように感じていた。胸の中に、内なる嵐が吹き荒れていた。彼は時に、突拍子もないことを打ち明けたい気分になったかと思うと、別の時には逆に、気持ちのたかぶりはすべて、深い苦悩と一種の恐怖感から、ぎゅっと閉じ込めてしまうのだった。(J.,p.164)

ギヨームの場合、心身の平衡と調和は一時的には回復し、揺り戻しの症状が出たとしても、それは、彼の望むところではない。アンドレの場合の無自覚さとは異なり、ギヨームは自身の崩れ去る姿を自覚し、そこに拘泥しないように努力を払っているように見える。しかしそれでもなお、むら気の発作は抑えられない。他人に対し、内面にかかえる困難や悩みをぶちまけるエゴイスティックな一時期があると思えば、それらをすべて無きものとして心の中におさめてしまう。このような一定しない態度は、結果的に、周囲の人間を振り回す原因となり、それがひるがえって、本人にも悪影響を及ぼしていく。

表出の不可能性

アンドレとギヨームに共通するのは、身体の弱さが

精神状態に影響する一方で、心のありようもまた、肉体へと影響する点であろう。この悪循環は当然のごとく、彼らの思考を硬直させ、行動する力を失わせてゆく。アンドレは小さい頃から「金になる仕事のことや安易な快楽に心を奪われている人々の中で、たったひとり」自分だけは違うと感じており、その結果、「彼は危険な問いを発するようになった」のである (A.,p.34)。

「こんなにして働いて、疲れて、何になる？ 快楽が何になる？ そのために働いて、それが何かの役に立つのか？ こんな娯楽を無理やりさせられるはめになるのと、倦怠に身を任せるのとで、余計に辛いのはどちらだろう？」 (A.,p.34)

これらの問いに対する答えをアンドレの後の生活に見出すなら、倦怠に身を任せた後に、快楽の源泉となりうる女性を発見したが、それを享受するにふさわしい手段も行動力も発揮することはなかった、ということになるのか。ジュヌヴィエーヴが妊娠したために、彼らは結婚することになるが、自立した生活を営むための能力がアンドレにはない。身重の彼女は懸命に働くが、アンドレは違う。

「僕は役に立つようなことは何もできない。白状するよ」とアンドレは答えた。「僕はこれまで本を読むことと、ぼんやり夢を見ることしかしてこなかった。僕はなにかの仕事をごなせるほど強くない。だけど、ほんの少し知ってることと、ほんのすこし持ってるもので、生活に困るようなことはないと思うんだ。」 (A.,p.119)

彼は自分が何の役にも立たないことを自覚しており、食い扶持を得るために仕事をするには弱すぎることも知っていて、なおかつそれを堂々と口にする。そして、このような、現実がわかっているかに見える発言の一方で、何もせずに生きていけるに違いないという、根拠のない自己への過信をも露呈しているのである。確かに、金になる仕事に精を出す人々が、ロマン派の作品の中で揶揄の対象になることはある。自己の快楽追求のためには、他人に危害を加えても気にしないマルシヤのような人物は、それ相応の罰を受け、対

価を払うことになる。だが、アンドレは、端的に言って、何もしない。あるいは、何をすることもできないような人物として構成されている。身分の違う恋愛をものともせずにジュヌヴィエーヴを愛し、結婚という形の責任を厭うこともないアンドレには、何かを果たすべき存在としての資質だけは確かに与えられているのだと言えよう。だが、同時に作家は、資質が表出するための手段を彼から奪っているのである。結果として、彼が愛したジュヌヴィエーヴは生き抜くことができないし、彼女との理想の結合が果たされることはない。物語の最後で、生き残ってもなお、何もすることがない（できない）状況に彼が置かれるのは、当然の帰結なのである。

ギヨームの場合にも同様の無力さが指摘されるが、無為と自己破壊に終わらず、次への展開が用意されている点においてアンドレとは異なっている。無理強いのようにジャンヌに言い寄ったが果たせず、その後、マルシャの策略から逃れようとして命を落とす彼女を見送った後のギヨームの姿は、一見、妻を失ったアンドレに重なる。

ギヨームに後悔がなかったわけではない。彼は苦々しい思いをこめて、ジャンヌを愛しすぎたこと、あるいはあまりにも愛さなかったことを自らに責め、そうしなければならない時に自分の情熱を抑えられなかったこと、ジャンヌに対し、ハーレー氏のような気高く献身的な愛情をまずは注ぎ、情熱などは英雄的態度であきらめるようにしなかったことを、後悔していた。不幸が役に立つこともあると言う。後悔が浄化の働きをするなら、それも正しいのだろう。ギヨームがその良い例である。彼は、華々しく行動を起こすようなことはまるでなかった。相変わらず夢見がちで、孤独を愛した。しかし彼は、偏見によれば自分より下にいることとなる人たちと関わる中で、どんな場合も深い思いやりと好意とを忘れなかった。こうしている時、彼は妹と義弟を真似ているだけだったのだが […]。 (J., p.284)

ジャンヌを失った後も、ギヨームには大きな変化はない、とされている。何かの啓示が与えられたかのような、神秘的な変化は、彼には起こらないのである。

彼は相変わらず夢見がちで孤独を好み、積極的に周囲との関係を充実させることもない。だがそこには、彼に行動をうながす人々の姿があり、それによってギヨームは生きていることを自覚し、受け入れることができている。

それは「不能 impuissance」と呼べるのか？

このような、心身のバランスがとれておらず、周囲との関係において機能不全症状を呈する男性たちにあって、性愛の問題はどのように働いている（あるいは働いていない）のだろうか。Gutermann は、この時代の感性豊かな青年に特有の「恋愛と苦悩」について次のように指摘している。

情熱によって呼び覚まされた自らの獣性 (animalité) と若い無垢な女性の聖性 (pureté) とのコントラストは、恋する男の苦悩をいや増すのだが、それはその苦しみが、恋する相手への敬意と、彼女の純粋さによってかきたてられる淫らな思いとの両方があることを強く意識させるからなのだ。流される涙も、それゆえ、同じように両義的なものだと言えよう。苦悩のただ中の恍惚を思わせる喜びの涙と、絶望の発作の中の苦しみの涙と…¹³。

彼らの心身メカニズムは両義的ではあるが、単純であるとも言える。一方には、精神性の絶対視と高貴なことへの憧憬があり、他方には、コントロール不能な身体的反応と欲望への嫌悪がある。こうした二律背反の状態は特にめずらしいものとは言えず、普通であれば、どこかの時点で解消されるか忘れ去られるかするに違いない。だが、そうした苦悩の中に一種の甘美さを求め、発見してしまう青年たちにとっては、その苦悩こそが目的になってしまうのである。苦悩を手放したくない意識の隅には当然、バランスのとれた恋愛関係の結果としての結婚に収まることへの躊躇いや、責任感の放棄が潜んでいる可能性が高い。苦悩を飼いながら彼らにはおそらく、日々を生き抜く活力や平穩に慣れる力が欠如している。

この観点から考えると、アンドレとギヨームという人物はとても理解がしやすくなる。違う言い方をすれば、サンドはこの時代の「感性豊かな青年たち」の特

微を見事にとらえ、アンドレとギヨームに投影したということになる。彼らのわかりにくい行動原理を説明しようとすれば、この種の苦悩をそのひとつに挙げることができるだろう。

では、彼らの男性としての「性的身体」は、どのように描かれているのか。この問題を考える時にとりわけ、アンドレとギヨームの造形のされ方に共通点が多いことがわかる。彼らは爵位を持った家の長男として育てられ、その家を背負って生きることを期待されている。その中には、つりあいの取れた結婚も含まれているが、彼らが愛するのはともに自身よりずっと下の階級に属する女性たちである。では、二人は身分違いの結婚を乗り越えようとしなかったのかと言えばそうではなく、むしろ、乗り越えようとして挫折するというのが正しい。彼らは愛する女性の純粋さを尊び、精神の美しさを讃えながら、そうした愛の崇高さを、自分が置かれた立場と融合させることができないのである。同じような境遇に生まれたレイモンには、小間使いのヌンを性欲のはけ口として利用することができたし、マルシャならば、自分の欲望を過不足なく満たすためにジャンヌを捕らえ、その身を自らのものにしようと画策する。アンドレとギヨームは、レイモンがヌンに対するのと同じ態度は取らないし、マルシャがジャンヌに対するのと同じ態度はとらない。だが、彼ら二人がいかに愛する女性を崇めていようとも、アンドレがジュヌヴィエーヴに、ギヨームがジャンヌに強い性的欲望を感じ、その結果、彼女らの身体を傷つけるきっかけを作るのも事実なのである。

アンドレの女性に対する関心と興味は「まだ見ぬ愛人、未来の幸福」(A.,p.38)という形で出発し、彼女を待つ気持ちの中には「苦悩と、さらに奇妙な甘美さ」(A.,p.37)が潜んでいると説明される。この「苦悩 souffrances」と「甘美さ douceurs」とは、まさに Gutermann の指摘するそれであり、彼の恋愛の根本を形作るものである。彼がジュヌヴィエーヴに初めて会うのは、彼女が花を探して森を散策している最中で、その時アンドレは「身震いをし、ついで、身をかがめ、20歩ほど離れた所に白い服を着た若い娘がいるのに気づいた」(A.,p.39)と描写される。この時、ジュヌヴィエーヴが一方的に見られているだけなのは重要で、アンドレは自分の中に作り上げていた空想上の女性と彼女とを結びつけることで、恋愛感情をス

タートさせたのである。その後のジュヌヴィエーヴの描写では、必ずといって良いほど「白さ」が強調され、アンドレが彼女に対し、汚れない無垢な女性の幻影を託したことが理解される。しかし一方で、彼は自らの性的欲望を抑えることができない。彼がジュヌヴィエーヴと性的関係を持つのは結婚する前のことであり、しかも彼女は熱病におかされて心身ともに判断力を失っている状況である。

アンドレは自然の意向に、長くは逆らえなかった。病気で苦しんでいるジュヌヴィエーヴは、彼女にとって、日を追うごとに慕わしいものになっていった。熱のために彼女の美しさはいつもとは違った輝きを示し、その顔の赤みと輝く目とは、彼女を別人とまではいかなくとも、より愛おしい、そして、少なくともより欲望をそそる女性に変えていた。アンドレは自分自身に打ち勝つことができなかったのである。彼は屈し、ジュヌヴィエーヴはその道連れとなった。(A.,p.156)

「自然の意向」とは、性欲とそのはけ口を持たないではおかれない身体性を言い換えたものであり、確かに彼はジュヌヴィエーヴを愛してはいるが、その気遣いは身体の前には有効な手段として働かない。熱病という非日常の事態におかれた彼女はいつもの「白さ」を失い、「赤み」を示している。アンドレは、彼女の本来ではない別の姿を見出し、自らの欲望を正当化するるのである。

では、ギヨームはどうか。ジャンヌは作品の冒頭から、マリアとジャンヌ・ダルク、さらにはドルイド教の尼僧という聖なる処女たちを引き継ぐものと位置づけられ、清貧・純潔・謙譲という三つの誓いを立てている。その彼女を愛したギヨームもまたアンドレと同様に、彼女を腕ずくで抱きしめる誘惑と欲望に打ち勝つことができない。それが「罪だと感じられる初めての恋」が飛び込む、無謀な情動だと自身でわかっていながら、ギヨームはジャンヌに自らの思いと欲望をむき出しのままぶつけてしまうのである(J.,pp.215-216)。ギヨームの場合、アンドレとは異なり、性的欲望を肉体にも果たさせる形で関係を持つことはない。が、そのあり方をジャンヌにふさわしい相手として造形されたアーサーと比較するとき、ギ

ヨームもまたアンドレと同様のジレンマから自由ではないことがわかる。

この若者はジャンヌに対し、小説でなら情熱と呼ぶようなものを抱いていた。ただそれだけのことで、それ以外の何物でもない。というのも、献身や勇気を持たせる深い愛情というものについては、彼はアーサーには遠く及ばなかったからである。[…] 人はよくこのような間違いをする。欲望の高ぶりで見えないものを愛着と取り違い、いついかなるときも失われない愛情が示す穏やかさを冷淡さと読み違える。ギョームはこの野の少女と結婚しようと考えたことは一度もなかった。(J.,p.207)

アーサーが精神性に裏打ちされた、確固とした愛情を持つことができる存在だとすれば、ギョームは明らかにその理想に到達できないもの、という評価を受けていることがわかる。欲望に忠実なマルシヤはこの作品内では罰を受けるかに見えるが、同じような生き方を許されて身軽なレイモンのような青年も存在しないわけではない。アーサーがあるべき男性の模範なのか、マルシヤやレイモンが見習うべき（あるいはうらやむべき）存在なのか。いずれにしても、ギョームやアンドレはどちらにもなれず、どちらにもなろうとしない青年像を示してはいないだろうか。

ここで再び、この時代の青年たちに求められた「性的身体」のあり方を確認しておこう。ブルジョワモデルが機能し、規範となり始めた1830年代にあって、男性は「家庭の夫＝父」になることで存在を確認されるようになる。妻と子どもを持つことが「社会的存在の根幹¹⁴」であって、それを実現できない男性は大人とはみなされず、社会の一員たるにふさわしいとは認められない。妻と子どもがセットになっているのは、もちろん家庭という場が「生殖 reproduction」を目的として存在するからであり、そのために男性に求められるのはセクシュアルな意味での能力の高さであり、それがなければ妻があってもなんらの意味も持たないのである。

その文脈に乗せて考えれば、アンドレは妻も子どもも持つことはできたが、持つと直ちに失うことになる。ギョームは物語の最終部から判断するに、ジャン

ヌの死後、妻も子どもも持つ機会が与えられているようには見えない。レイモンが結婚し、オラースやマルシヤが社会的成功を遂げられるのとは逆であり、ジャンヌの遺志を汲んで社会改革に力を尽くすアーサーとも、大きな差を持って描かれるのが彼らである。性的身体を発動させるための欲望には恵まれ、それを使うことを意識していたという意味からすれば、アンドレもギョームも、この時代において最も忌み嫌われた男性の「不能 impuissance」をそのまま体現しているわけではない。しかし、彼らの身体に、自分自身の未来へと何かをつなげる力が与えられていないという意味では、この状況もまた「機能不全 dysfonctionnement」の一端と理解するべきだろう。少なくとも彼らは《reproduction》の種となれないという意味で、男らしい男の範疇からは遠く隔たることになるのだ。

「男らしさ」の欠如とジェンダーのゆらぎ

最後に、彼らが表象する男性らしさ（の欠如）はどのように説明できるのだろうか。ひとつにはKerlouéganが言うように、ロマン派的想像力を刺激した「不能」や「肉体的不完全」への憧れという、一見「負」の存在でありながら、同時に「不可能な奇跡」を生み出す身体¹⁵と考えることも可能だろう。この場合、「反ヒーロー」の持つ逆説的な性格から、「理想的男性像」となることもありうる。が、これまでの分析によって明らかなように、アンドレもギョームも「不可ではないが、可であることは決してない」というスタンスを守って描かれており、むしろ、理想像へとシフトされないことに意味があると考えられる。また、彼らがなぜこのような機能不全を背負った主人公として見えるのかという問いを立てれば、彼らの持つジェンダーのあいまいさがまず指摘できる。アンドレとギョームは共に「少女のよう」と形容される場面があるが、いずれの場合も褒められているわけではなく、不適切だというニュアンスが込められている。男性性と女性性の間を揺れ動く「両性具有性 androgyne」は、調和の結果とみなすこともできるし、男女という区分によらない新しい価値観の源泉と考えることもできるだろう。しかし、彼らが示すのが「女性性」であるとしても、それは女性の性を理解し、尊重するゆえに獲得されたものではなく、「男性

性の欠落＝女性性の表出」といった意味合いのものである。彼らの中には確かに旧来の「男性性」や「男らしさモデル」には見られなかったものが書き込まれ、今後何らかの形で実を結ぶことが予感されないこともないが、二人の造形はまだ、機能不全としての男性性の欠如の域を出ないのである。

このジェンダーのあいまいさを作り出したのはもちろん本人であるが、アンドレの場合は父侯爵が、ギヨームの場合は母が強い影響を与えているのは見逃せない。アンドレの場合、父が前時代からの価値観を象徴的に現しており、それを彼に強いることで「去勢者 castrateur」の役割を果たしていることは明らかである。田舎貴族であるモラン侯爵は豪胆さや猛々しさ、賢く立ち回る柔軟性を賞賛するが、息子はこのような資質をことごとく有していない。アンドレは教育を受け、父親からは強い自意識を受け継いでいるため、相手にやすやすとは迎合しない。だが、不満を吐き出して抵抗する力もなく、そのことが父侯爵を最もいらだたせるのである。ジュヌヴィエーヴとの結婚の承諾を得に来たアンドレに対し、父は、

「泣いて、やせて、死んでしまえ。お前みたいなばか者には生きている資格もないわ。絶対に、私の承諾が得られると思うな。そうしなければ、私が死ぬのを待てばいいさ、だがそうはさせてやるものか、お前に思い通りあんな女と結婚させてやるなんて…。」(A., p.150)

と答える。この強い嫌悪の中には、アンドレ個人への失望と同時に、息子の役割を果たせない者への叱責があるが、それが逆にアンドレから男性ジェンダーの発露のきっかけを奪い、立ち直らせることもしない。

ギヨームの場合は父がナポレオン軍の将校として死亡しているため、アンドレのような弊害をこうむることはないが、他方、母親からの影響と圧力に屈することを余儀なくされる。父親からの圧力は、自らを理想の男性とみなすことから生じる、不肖の息子への強迫や軽蔑といった形で描かれることが多く、アンドレもその典型的な例である。このような強圧的な態度は、対象となる息子たちを激しく傷つけることにはなるが、ある意味では理解しやすく、その気があれば防御の体勢も整えやすい。一方で、母親からの圧力は、あ

からさまでないだけに、かえって彼らの心情を揺さぶり、あるべき男性に同化しようとする意思をぐらつかせることになる。ギヨームの母は、息子を甘やかしてはいるが、自分の意志を押し付け、意のままにさせようとしているわけでもない。ただ、彼女は自分の安楽を考え、息子をその一部とみなしているだけのことである。しかしこのことは、青年の自我の確立と社会的自立を大いに妨げる結果になる。妹のマリーが進取の気性に富み、ハーレー卿と理想を語るのにふさわしい女性になる一方で、兄のギヨームはまるで妹と性別が逆転してしまっているかのように語られる。それを助長しているのは母親との同化であり、その結果のジェンダーの揺らぎであろうと考えられる。

男性の成長にあたり、実は父ではなく、母の存在が大きな影響力を持ち、その度合いも時代が進むにしたがって強くなっていくことは、今まであまり指摘されたことがない。このような激しくぶつかり合うわけではないが、呪縛とも言える関係性へシフトしていく「母－息子」関係は、ギヨームのような青年のヒーローになれない体質の、一因と考えられるのではないだろうか。この問題に関しては当然、母親が置かれた立場からの考察が不可欠で、母親にあらゆる非を見出すことが議論の目的ではない。フランスが第二帝政期から世紀末へと向かうにあたり、さらに顕著になると思われるこの現象については、稿を改めて検討したい。

[注]

- 1 拙論「『男らしさ』はどう描かれているか—ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』を題材に—」(『外国文学研究』第28号、奈良女子大学文学部外国文学研究会、2009年、pp.39-62)を参照されたい。
- 2 Deborah Gutermann, 《Le désir et l'entrave. L'impuissance dans la construction de l'identité masculine romantique : première moitié du XIX^e siècle》, in *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours*, p.58. 以下、フランス語のテキストからの引用は拙訳による。
- 3 George Sand, *Indiana*, Collection Folio, 1984, p.166. 以下、この作品はI.と略記し、ページ数のみを示す。

- 4 André Rauch, *Le Premier Sexe – Mutations et crise de l'identité masculine*, Hachette, 2000, p.97.
- 5 *Ibid.*, p.33.
- 6 George Sand, *Horace*, Editions de l'Aurore, Meylan, 1982, p.61.
- 7 George Sand, *Jeanne*, Editions Glénat, Grenoble, 1993, p.67. 以下、この作品はJ.と略記し、ページ数のみを示す。
- 8 François Kerlouégan, *Ce fatal excès du désir : poétique du corps romantique*, Champion, 2006, p.249.
- 9 Gutermannはこの「反ヒーロー」モデルについて、次のように述べている。「ロマン主義文学には重要なファクターである反ヒーローの流行は、弱い男を讃えることで偶然に、感受性豊かな理想像というものを流布することになった。そうした理想は女性的なものだとか、評価できないものとかいうニュアンスをもった属性を、美化し称揚したのである。」(Deborah Gutermann, 《Le gendre de l'homme sensible dans le premier XIX^e siècle – Esquisse d'une masculinité équivoque》, in *Masculinités*, Série Sextant 27, Université Bruxelles, 2009, p.302) ここで、「反ヒーロー」はある種の理想をなすとされているが、以下に論ずるように、アンドレやギヨームにはその役割は与えられていない。
- 10 François Kerlouégan, *op.cit.*, p.237.
- 11 *Ibid.*, p.245.
- 12 George Sand, *André*, Editions de l'Aurore, Meylan, 1987, p.34. 以下、この作品はA.と略記し、ページ数のみを記す。
- 13 Deborah Gutermann, 《Le gendre de l'homme sensible dans le premier XIX^e siècle – Esquisse d'une masculinité équivoque》, p.305.
- 14 André Rauch, *op.cit.*, p.97.
- 15 François Kerlouégan, *op.cit.*, p.273.

Les Corps des hommes antihéroïques dans les romans de George Sand – d'*Indiana* à *Jeanne*

TAKAOKA Naoko

Au cours de la formation des nations modernes, chaque pays a cherché à établir les images de son peuple idéal. En traitant des problèmes de la mutation des masculinités, nous avons déjà examiné les caractéristiques des hommes idéalisés et leurs évolutions, mais il nous reste à étudier celles des hommes qui n'arrivent jamais à s'adapter aux circonstances.

George Sand nous a montré dans son premier roman, *Indiana*, deux types de jeune homme d'«après Napoléon». L'un, représenté par Raymon de Ramière, qui peut s'adapter très facilement aux mouvements changeants de la société ; l'autre, Ralph Brown qui, en chérissant son idéal républicain, ne réussit pas à trouver sa place dans la société qui lui est contemporaine à cause de son tempérament sombre.

Hors de ces deux catégories principales, nous remarquons que le troisième type de jeune homme, mentalement et physiquement faible, apparaît assez fréquemment dans les romans sandiens des années 30 et 40 du XIX^e siècle. Parmi eux, André dans *André* et Guillaume dans *Jeanne* retiennent particulièrement notre attention du point de vue du corps.

Premièrement, c'est la faiblesse du corps qui caractérise ces personnages. Ce corps maladif et mal mené sont les signes de la virilité déficiente et du dysfonctionnement de son identité masculine. Deuxièmement, malgré ces caractéristiques, ils ne sont pas sexuellement impuissants. Ils ne peuvent pas maîtriser l'élan d'un désir sexuel, et ils blessent même le corps des femmes qu'ils aiment. En tenant compte du fait que le rôle principal des hommes

est, à cette époque bourgeoise, compté pour devenir «mari et père de la famille», nous pouvons dire que ces personnages sont très équivoques. Ayant la puissance sexuelle, ils n'arrivent pas cependant à bien régler cette force, c'est-à-dire que la capacité de reproduction leur manque. Finalement, l'ambiguïté du genre est remarquable chez ces personnages. Ils sont souvent comparés à des filles, tandis qu'ils n'éprouvent ni de sympathie ni de compréhension profonde pour le sexe féminin.

Il nous faudra donner les réponses à cette question : pourquoi ces sortes de personnages, ont-ils apparu si souvent dans les romans de George Sand ? Pour cela, nous commencerons par examiner les rôles de mères dans la formation des jeunes hommes.